

生徒Aの変容

入学当初は、小学時の様相そのものであった。問題行動をとり、そのための話をしようにもその場には来ない。来たとしても集団で訪れて話すに至らない。そのうちに対教師反抗や暴言を繰り返すという相乗的な相互作用もあって本来向き合わなければならない問題以外にまた新たな問題が発生する。まさに雪だるま式のものであった。

しかし、学年教員の姿勢を維持し、担任を中心としてAの課題と向き合い、寄り添い続けた。転機が訪れたのは5月。宿泊体験先で、担任とともに学級の仲間について考えたことであった。体験先で大縄跳び大会に向けての学級練習をしているとき、縄に足をとられた仲間をののしる発言をした。担任は決して許さず、Aの発言したことと向き合い、Aの内面に寄り添った。Aは泣きながらも自分の発言を正当化しようとした。A：「けど、勝ちたいもん」…「みんなで勝ちたいもん」前答は自分の気持ちで今までの姿と同じである。後答は仲間との関係性をもった思いであった。Aの後答を担任は逃さず、一緒になって「みんなで…」をじっくりと考えさせた。「みんなと」の世界に存在している自分の振る舞いに気づき、ののしった相手へどうすべきかを自分で考え出すようになった。

教師不信、大人不信の目をしていたAは、担任との信頼関係を築き始めた。変化が現れたのは、ことばであった。教師を指すことばが「なあ」「あんた」「おまえ」だったのが「ねえ」「ちょっと」と変化を遂げ、「…先生」と丁寧なことばで話すようになった。

信頼を築き始めてからは、授業ではノートをとり質問も増え、いくつもの構成された学習の機会へ身を投げ始めた。今では「パワーアップシート」も欠かさず提出している。

また、所属している運動部活動を通して地域の清掃作業や行事へも参加している。そこで、出会った地域の方々(小学時からの知人は変容した姿に驚いている)にも声をかけてもらい、Aの持つ他者との関係性は随分と広まった。よって現在のAの姿は想像できるであろう。

これは構成の多くに身を投げ、そのなかで数多くの学びを獲得してきた事例である。

生徒Cの変容

(小学時、入学当初の様相はAに等しく略する)

Cは落ち着きもなく、周囲の状況も考えずに奇声を発したり、突然教室を出たり、ゴミを散らかしたり、暴言を吐く。気ままな中学生である。何か問題が起きないかわくわくしている感じがよく見受けられた。常に刺激を求めて行動しているようにも窺える。AやBと教師が話をしなければならない時には、必ず登場しては、問題をややこしくする。

6月頃から一層教室から飛び出すことが増えた。教室へはすぐに帰ってくるものの、またすぐに飛び出る。さまざまな構成の機会を準備してはいるが、なかなか接点を見出すことができない。つながりを持ち始めたと思えば、すぐに途絶える。このCの様子は学年教員間で常に情報を共有していた。AやBが努力し始めていたその時期。チャイムでの着席ができないことや落ち着きがなく飛び出す原因が友だちとの関係性に不安を感じていることにあると感じた。授業始まりから休み時間まで関わりながら観察をした。チャイムで着席もできないのもAやBを含む友だちのいる教室を毎時間巡回してから教室へ向かう姿にあった。(言わばマーキングのようであった)

地域行事へ参加するものの何をしにきているのか分からない行動をとる。単にAやBが行くからついてきているのである。この時の生徒同士の会話を学年担当教員が捉えていた。A：「Cは向こうの班やろ、自分の班でやりや…」今までは決めごとやルールなど構成されたものに対して「何でもあり」の姿で受け入れていたAとCの相互関係に距離をおいたのである。Aは行事の構成に身を投じているから目標とその先にある学びの楽しさに期待し、そこへ向かうための責任を果たそうと動きはじめているのに対し、Cは気付かない。しかし、Aの邪魔をしてはいけないと配慮した行動を示していた。

この様子を教員間で共有してからは、成長しはじめたAやBの築いてきた関係性の力を利用することでCの「学びへの構成」を考えるようになった。キーワードは「ほどよい距離感」である。

何故「ほどよい距離感」なのか。自分がやりたいことを捨ててまでつき合わなければならないからである。つまり、本章でいう構成に向かえないのである。互いの人間関係の構成につながりをもっているものの、そこでは学びの達成感も継続性もほとんど存在しない。数名程の友だちのなかで「(自分が悪いことで)悩みを相談しても、全員が自分の味方で、誰も叱って(注意)くれない」(B本人談)、「先生に謝ろうって思っても、みんながついてくるき、結局噛みついてしまう(暴言)」「ついて来ないで、ってよういえない」(A本人談)。

これらは、本音で語り、本気で怒り、相手のことを親身に考えるという関係に程遠い。友だちとの関係に心地よさを求めるならば一定の距離が必要である。このような姿からABCと筆者(学年教員含む)が雑談をする際に、幾度も友だちとの関係は「ほどよい距離感を意識しあった方がいいよ」と話してきた。AB相互の関係は一気に飛躍した。

しかし、Cへの変化はあまりみられない。確かに多少は成長している。それはCを取り巻く仲間の成長、その成長にともなって多くの構成が準備されているなかで育まれているものであると考える。まさに、本書で述べた他の学習者が学習者に影響する「学習の正の転移」に期待するものである。

現在(3学期)、Cの考えた目標は「先生に噛みつかない(暴言を吐かない、偉そうに言わない)」である。

これは様々な構成に身をおこうとするが、なかなか学びを獲得できない事例である。

<資料－「宿題アンケート」調査対象者>

	第1回 7月実施	第2回 12月実施
A 中学校生徒	回答者 452 人 (1年 148 人、2年 161 人、3年 143 人)	回答者 451 人 (1年 143 人、2年 158 人、3年 150 人)
B 中学校生徒	回答者 83 人 (1年 29 人、2年 27 人、3年 27 人)	回答者 171 人 (1年 58 人、2年 65 人、3年 48 人)
C 中学校生徒	回答者 88 人 (1年 24 人、2年 31 人、3年 33 人)	回答者 163 人 (1年 50 人、2年 56 人、3年 57 人)
D 中学校生徒	実施せず	回答者 453 人 (1年 156 人、2年 154 人、3年 143 人)
	第1回 総計 623 人	第2回 総計 1,238 人